

ケープタウン会議 福島はレベル6



札幌医科大学教授

高田 純

今年五月七日、私は片道三十時間の旅に出た。四年に一度開催されるオリンピックのような放射線防護学の国際会議、IRPA14ケープタウン会議に出席するためである。

新千歳空港でチェックインすると、重量十五キログラムのトランクだけは、終着地の南アフリカ共和国南端の都市の空港まで、途中受け取りせずに、届くことになった。一方、本人は羽

田、シンガポール、ヨハネスブルクの各経由地で乗り継ぎ、しかも窮屈な座席で長時間の苦行となった。往復六十時間、現地五泊の会議で、私の体重は二キログラム減った。

インド洋側からアフリカ大陸上空に入り、大西洋を眺めながら、大陸南端の晴天の空港に着陸。予約していたタクシーに乗り、周辺の貧困層の平屋住宅群を見てから、三十分ほど走る。途中、山頂が真っ平になったテーブルマウンテンを見上げた。

宿は会場となる国際コンベンションセンターから一・五キロメートルほどの落ち着いたホテルである。当然のことだが、従業員は全員が黒人で英語を話す。シャワーを浴びて、ひと眠りした。赤道から南極に向かって三千七百キロメートルにある現地は意外に寒かった。翌月曜日から始まる会議に備えて体調を整える。

人種隔離政策アパルトヘイトが一九九四年まで続いた国。マンデラ大統領の顔が紙幣に印刷

されており、市内の壁にも大きく描かれている。会議場で働く女子に聞くと、今でも、マンデラさんは、大人気のようなのだ。

外務省の情報では、治安要注意という。世界各地の調査で身に着けたサバイバル術として、君子危うきにちかよらず、近距離でもタクシーで往復する六日間を過ごした。ただし、運転手と話していて、いいこともあった。彼らは日本に敬意を払っている。特に日本車の高い技術を知っている。格上の南アとのラグビーの試合で日本が勝ったのも良い思い出のようだ。

開会式のホールには、およそ一千人の専門科学者たちが集まった。レナート・サルビンスキ（IRPA代表）、ティアガン・パーサー（ケープタウン会議大会長）ら主催者らがあいさつした。

第十四回国際放射線防護学会ケープタウン会議は、IRPA五十周年の記念と重なった。アフリカ大陸最初の会議である。南アには原子力

発電二基が三十年以上稼働し、国の電力の九〇%以上を発電している。

天野之弥IAEA事務局長は、核エネルギーの平和利用のパートナーであるIRPAの取り組みに大きな期待を寄せ、チェルノブイリ事故三十周年で、核の完全と放射線防護知識の世界的共有化が進み、福島事故から五年が経った今、核エネルギー施設の安全性が大きく進化していると話した。

前回もそうだが、日本の報道機関は全く参加していない。こうしたところに、放射線報道の怪しさの事実が見える。皆さんの税金のような資金で放送しているNHKは、ケープタウンでの国際会議に來ていない。公共放送の名を返上すべきではないか。福島の放射線に対し、いかにおかしいな放送をしてきたかは明白。前回のグラスゴー会議も欠席だったのだ。

今回のシーベルトレクチャーは、受賞者のアメリカ放射線防護学会長であるジョン・ボルト



展示会場南アフリカのブースにて

福島二十キロ圏内の低線量の実際の調査を報告した。低線量事実賛同があっても、反論なし。福島は国際核事象尺度で6とする私の評価について、議長は賛成を述べた。二〇一一年四月に原子力安全保安院が断定した、福島レベル7は、IRPA14ケープタウン会議で否定された。

福島二十キロ圏内が低線量で、チェルノブイリ黒鉛炉事故・レベル7はもちろん、レベル6のキシュティム事故より低い放射線影響だったことを、世界の専門家たちが理解した。ただし、同じ軽水炉のスリーマイル島事故レベル5の線量影響よりも上である。したがって、福島軽水炉事故はレベル6か6弱。その後、私は、官邸、原子力規制庁などへ、ケープタウン会議の結果をメールした。

タクシーで観光した絶景の喜望峰では、大航海時代の歴史を垣間見た。浜辺には野生のペンギンたちが保護されている。世界最初の心臓移植が行われたのはケープタウン大学医学部であった。魅力溢れるアフリカ大陸だが、日本からはあまりにも遠い。再度の訪問はあるのかな。

【訂正とお知らせ】

鷺乃声七月号掲載のガリレオの休日⑦「一万年間の家賃」にある五〇頁の上段の「西暦六五八年」は間違いで、正しくは「西暦六五九年」です。訂正し、お詫び申し上げます。なお、「ガリレオの休日」は、今回が最終回です。

博士が、「公衆をいかに守るのか」の演題で講義した。レントゲン・マリー以来の徹底した放射線防護の取り組みや進歩を振り返る内容で、数年に一度の防護知識の改定、疫学研究の継続、直線しきい値無仮説LNTの問題ありの指摘、広島生存者・原子力発電所作業員は非直線リスク、ラドン線量の健康リスクは意外になかったなどをまとめた。

放射線防護学は、医学的リスク研究の中で最も進んだ科学ではあるが、過剰に防護する傾向も

にあると私は思う。しかも、放射線被曝の健康増進効果を完全に無視した体系になっているのが最大の問題点である。

IRPA会議の私の参加は、今回で四回になる。私のこれまでの科学報告は、二〇〇〇年IRPA10広島会議で「東海村臨界事故時三百五十メートル圏内住民の線量」（口頭発表）、二〇〇八年IRPA12ブエノスアイレス会議で「中国の核実験」（ポスター発表）、二〇一二年グラスゴー会議で「広島県民の線量二〇一一年」（ポスター発表）、そして今回二〇一六年IRPA14ケープタウン会議で「福島二十キロ圏内住民の低線量の真実」（口頭発表）。

これに加えて、二〇〇七年IAEAウィーン会議で私は、北朝鮮の最初の核実験の日本影響について口頭報告した。

会議二日目の午後のセッション・核放射線緊急時の放射線の監視と評価には、およそ百五十人の線量評価の専門家が集まった。その三番手